

する。

- ・(オ)は、頂点の棒を抜いて輪郭を表す棒だけで、三角形の分解・構成を行う教材で、(エ)と同じ方法で学習する。
- ・正方形を、三角形(ア)～(カ)と同じ方法によって分解・構成ができるようにする。

【留意事項】

- ・内側に一回り小さい図形を置くことで、線図形と板図形が同じ形であることを気がつくよう促す。

(3) 線図型の分解・構成 2

〈ねらい〉

見本と同じ図形を枠のないところで線図の分解・構成の理解を促す。

〈内容〉

提示された三角形と同じ形を作る。逆に一辺ずつはずして残りの棒磁石の位置、方向を確かめながら分解する。正四角形も同じ方法で分解・構成する。

【留意事項】

- ・棒磁石による形の分解・構成は、初めに丸磁石を使って頂点となる場所を定位し、丸磁石と丸磁石の間を棒磁石で結んで分解・構成をする方がよい。
- ・板磁石をより細く切ったもので分解・構成を行うことで、線図の弁別につながるよう促す。
- ・定位ができているときには、角の位置を右手前、左向こうと言葉で表現する。

第4節 点の位置付けと6点の弁別

ここまで、点字学習のレディネスや動機付けについて、初期的な手の運動の学習、触覚による弁別学習、図形の弁別、構成・分解の学習と、三つの節に分けて述べてきた。このような点字を読むためのレディネスが整ったら、第4章の触読の学習に進むことになる。触読の学習は、実際の点字を指で触りながら学習するのが基本である。

しかし、児童等の実態によっては、実際の点字での触読が難しい場合も

ある。視覚以外の障害や発達の特徴を有していたり、中途失明であったりする場合などである。以下に、そのような場合の工夫、手立てとしての教材・教具を紹介する。

1 点の定位

ここでは、一定の平面上に1点、2点（左右、上下、向こう手前）、3点（左・中・右、上・中・下）、4点（左上、左下、右上、右下）、6点（左上、左中、左下、右上、右中、右下）、9点の位置、方向、順序を確かめながら点の定位の理解を促すことについて述べる。

(1) 1点の定位

〈ねらい〉

空間の中の1点の定位を促す。

〈内容〉

- ・玉落としや玉入れ、一つの穴にペグの抜き差しをする。
- ・一つの箱に玉などを入れたり出したりする。
- ・本章第1節を参照

(2) 2点の定位

〈ねらい〉

空間の中の2点の定位を促す。

上下と向こう手前が同じであることの理解を促す。

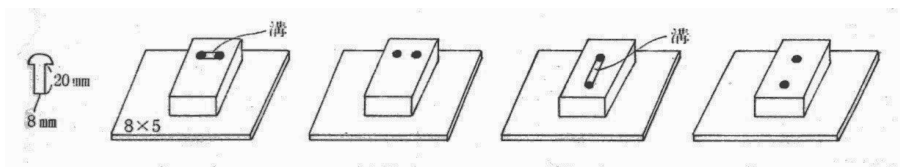


図 3-35

〈内容〉

- ・2点の穴にペグやリベットを抜き差しする。スライディングブロックを端から端に動かす。
- ・2点の穴が空いたものを二つ用意し、教師が入れたペグの位置と同じ位置にペグを入れる。縦（向こう、手前）横（左右）に提示する。
- ・教師が入れたペグが、左右向こう手前のどちらに入っているか言葉で

表現した後、自分のペグを入れる。

- ・教材を3つ用意して、見本合わせをする。
- ・盲幼児児童と一緒に教材を垂直に立てたり、横に動かしたりすることで、「上」「下」と「向こう」「手前」の位置関係を確認し、向こう手前を上下とも表現することを教える。

【留意事項】

- ・点の定位の学習を行う場合、教材の縦方向と身体座標軸の前後方向を一致させるために、体が正面を向くようにまっすぐ座ることが大切である。
- ・左右上下については、本章第2節を参照。
- ・身体座標軸の前後や上下が混乱しないように、始めは机上での「上下」を「向こう、手前」と表現する。
- ・空間（図形）の拡大縮小の理解を促すためペグ差しの教材は肩幅から、幅10cm位までの大きさをいくつか準備し、実態に合わせて教材を段階的に提示する工夫をするとよい。
- ・教材の提示の仕方は、向こう手前から左右の順、縦並びから横並びの順にする。教材を横に並べることは横並びは軸が移動するので軸が同じになる縦並びから行う。

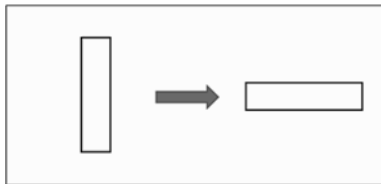


図 3-36-1

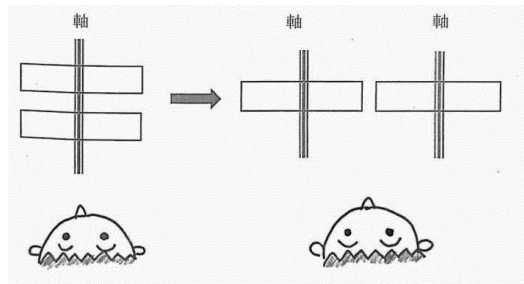


図 3-36-2

- ・見本と同じ位置に入れる学習では、教材を並べるときには、始めは隙間なく並べ、少しずつ離すようにする。離すことで、「右」「左」と言葉で記憶することにつながる。

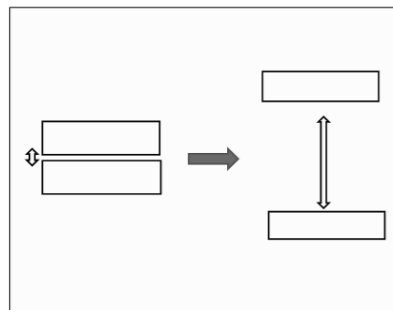


図 3-37

- ・ 穴と穴の間にガイドとなる溝のあるものから溝のないものを使うようにする。
- ・ 左右上下の見本合わせの学習は、鏡字の誤読を防ぐことにつながる。
- ・ 向こう、手前と上下の言葉の関係の理解が難しい場合には、盲幼児児童が分かる「向こう」「手前」の言葉だけを使うようにする。
- ・ ペグの位置で定位が難しいときには、左右異なる音が出ることでフィードバックしやすい教具などを用いて左右を意識できるようにする。
- ・ 教材の大きさや点の間隔を変えても、点の位置、方向、順序及び点の位置の名称は変わらないことを意識させる。
- ・ 操作性や触察しやすい物等、盲幼児児童の実態に合わせて、教材を工夫するとよい。

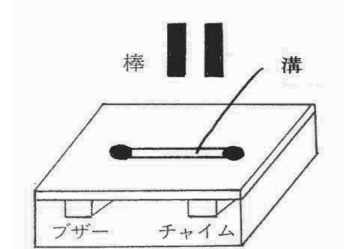


図 3-38

(3) 3点の定位

〈ねらい〉

空間の中の3点の定位を促す。

〈内容〉

- ・ 3点の穴が空いたものを二つ用意し、教師が入れたペグの位置と同じ位置にペグを入れる。縦（向こう真ん中手前）横（右真ん中左）の順に提示する。
- ・ 教師が入れたペグが、どこに入っているか言葉で表現した後、自分のペグを入れる。それぞれが入れるペグを1本から3本に増やす。
- ・ 教材を3つ用意し、見本合わせをする。

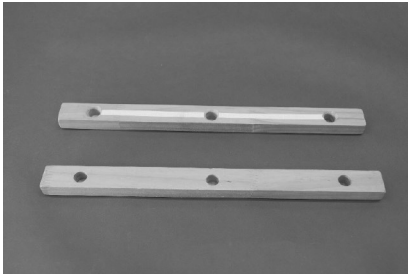


図 3-39-1

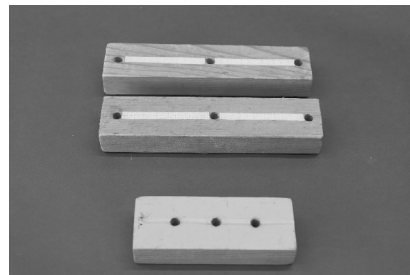


図 3-39-2

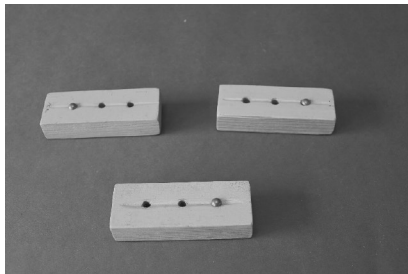


図 3-39-3

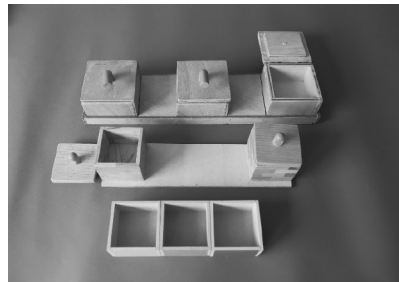


図 3-39-4

【留意事項】

- ・ 空間（図形）の拡大縮小の理解を促すため、教材は肩幅から、幅の狭い、ペグやリベットの教材を段階を分けて提示する。
- ・ 縦（向こう真ん中手前）から横（左真ん中右）の順に提示、縦並びから横並びにする。教材を横に並べることは軸が移動するので軸が同じになる縦並びから行う。
- ・ 見本と同じ位置にペグを入れるとき、初め隙間なく並べ、少しずつ離すようにする。
- ・ 教材の大きさや点の間隔を変えても、点の位置、方向、順序及び点の位置の名称は変わらないことを意識させる。

(4) 4点の定位

〈ねらい〉

空間の中の4点の定位を促す。

〈内容〉

- ・ 4点の穴が空いたものを二つ用意し、教師が入れた見本となるペグやリベットの位置と同じ位置にペグやリベットを入れる。

- ・教師が入れたリベットが、どこに入っているか言葉で表現した後、自分のリベットを入れる。リベットを1本から順に4本に増やす。
- ・教師が指示した位置から取ったり、指示した位置に入れたりする。

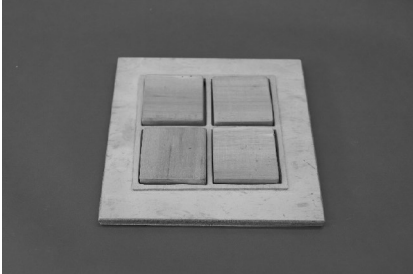


図 3-40-1

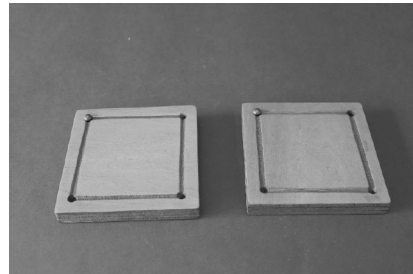


図 3-40-2

【留意事項】

- ・教材は縦並び横並びの順番で提示する。

(5) 6点の定位

〈ねらい〉

空間の中の6点の定位を促す。

〈内容〉

- ・縦3点、横2点の6つの穴の教材を用意し、ペグやリベットを抜き差しする。
- ・左上、左中、左下、右上、右中、右下の位置と言葉を理解する。
- ・教師が入れた位置を言葉で表現した後に、自分のリベットを同じ位置に入れる。リベットの数を1本から順に6本に増やす。
- ・教師が示した位置に入れる。
- ・教材を3つ用意し、見本合わせをする。

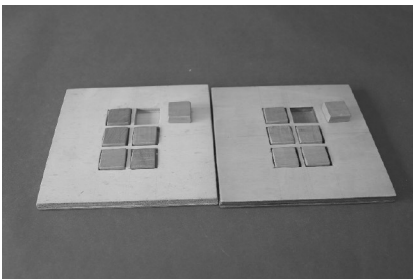


図 3-41

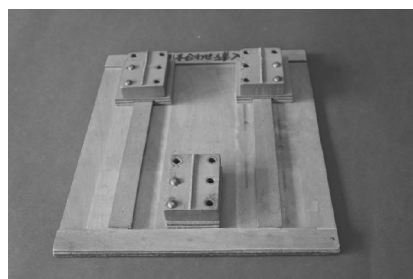


図 3-42

【留意事項】

- ・ 6点の教材で定位の学習をするときには、点字の音とは結び付けないようにする。

(6) 9点の定位

〈ねらい〉

空間の中の9点の定位を促す。

〈内容〉

- ・ 縦3、横3に並べた箱に、位置と名称を確認しながら、玉などを出し入れする。

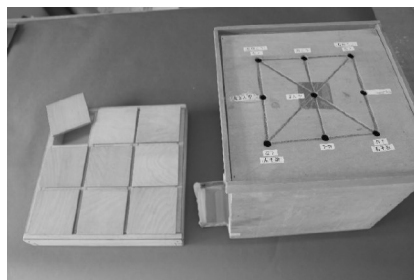


図 3-43

【留意事項】

- ・ 9点の定位は、点字には直接関係はないが、空間の把握などに必要となるので取り上げるとよい。

2 6点の弁別

ここでは、点字模型を用いた6点の弁別と、6点の名称の置き換えについて述べる。

(1) 点字模型の6点の定位と弁別

〈ねらい〉

- ・ 様々な大きさの点字模型の6点の定位をする。
- ・ 様々な大きさの点字模型の6点の組み合わせの弁別をする。

〈内容〉

- ・ 大きさの違うリベット等の点字模型を用いて、縦3点、横2列の6点の位置を正確に定位できるようにする。

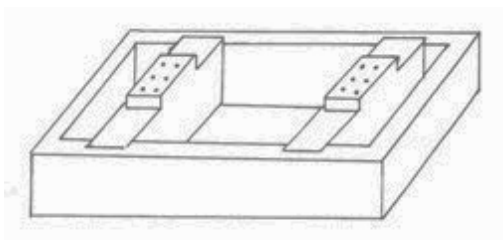


図 3-44

- ・点字模型の見本合わせをする。

【留意事項】

- ・紙の点字の弁別学習にスムーズに入るために、6点の点字模型を段階的に小さくしながら弁別をする。点字模型の大きさを変える段階については、実態に応じて考えるとよい。
- ・点と点の間隔が小さくなっても、点の位置、方向、順序などが変わらないことを意識させる。
- ・重複障害のある児童生徒の中には位置の理解、音との結び付けはできるが、通常の大さきの点字の弁別が難しい場合がある。そのときには、大きな点字やシールに書いた点字、点字模型の点字などを活用し読む活動を行うことが望ましい。
- ・両手で触察する大きさの点字模型の弁別をするときには、点字の読みと結び付けないようにする。

(2) 点の位置の名称の置き換え

〈ねらい〉

6点の位置の名称を1の点、2の点、3の点、4の点、5の点、6の点と置き換えるようにする。

〈内容〉

- ・点字模型を組み立てる。そのときに、6点の位置の名称を「左上」を1の点、「左中」を2の点、「左下」を3の点、「右上」を4の点、「右中」を5の点、「右下」を6の点と置き換えるようにする。
- ・リベットが何の点にあるかを言う。
- ・見本の点字模型を触って、もう一つの点字模型に見本と同じ位置にリベットを差すようにする。指示された点の位置のリベットを抜いたり、指示された位置にリベットを差したりできるようにする。

【留意事項】

- ・既に学んでいる「左上」、「左中」、「左下」、「右上」、「右中」、「右下」という点の位置の名称を、具体的な操作を通して1の点、2の点、3の点、4の点、5の点、6の点に置き換えることが大切である。
- ・名称の置き換えをするとき、6点の模型を1 2 3と4 5 6で分けて縦に並べ、1～6の点を確認してから横2列に並べたり2列あることが意識できるよう点字模型の1 2 3と4 5 6の高さを変えたりする等の工

夫をすると左下の3の点から右上の4の点への移動がスムーズになる。

第5節 点字学習の基礎としての話し言葉の学習

点字を学ぶ前の盲幼児児童にとっても、話すことに意欲や興味を持ち、経験したことを楽しみながら言語化する方法を学習することは、その後の点字の読みや書きの学習の基礎となる。文、文節、単語、音(拍)というひとつつながりの概念を、言語活動(聞く・話す)を通して学習することによって、言葉だけでなく、思考や認識も育てていくことにつながる。

そこで本節では、話し言葉の要素を分解・構成して、これらの関係を明確に意識付けることを取り上げる。さらに、点字の読み書きの学習のレディネスとして、音による単語の分解・構成の学習を取り上げる。

1 話し言葉の要素の分解・構成

いろいろな言葉遊びを通し、楽しい雰囲気の中で、単語を使って文を作る練習を行っていく。そして、日常の会話は関係性のあるいくつかの言葉の組み合わせで成り立っていることに気付き、言葉を組み立てて、自分が経験したことを詳しく話すことができるようにする。

(1) 「どうしたかな」

〈ねらい〉

「だれが・何を・どうした」の文の形で、いろいろな動作を言い表す練習をする。

〈内容〉

教師は、例えば「ボール」を用意して盲幼児児童が触った後、「先生がこのボールを使って何をしたか当ててください。」と言って動作をする。「先生がボールを」まで言ってボールを転がすと、盲幼児児童は「転がしました。」と言い、もう一度初めから「先生が ボールを 転がしました。」と言って正しい言い方に気付くようにする。

同様に、教師が「〇〇さんがりんごを持っています。どうするのでしょうか。」と言って盲幼児児童は動作を考える。「食べた」、「かじった」など言い、動作化するように促す。次にそれを正しい言い方で話すようにする。一番初めは、動作をしている人の名前、2番目は、物の名前、